

〈公募論文〉

指示詞の論理

島 守 玲 子*

キーワード: ダイクシス, テクスト・ダイクシス, 照応, 視点, 共感度(E)

要 旨

従来, コソアは三項対立(コ/ソ/ア), あるいは二重の二項対立(コ/ソ, コ/ア)という考え方で説かれてきた。しかし, 実際にはコソアはこの両者の組み合わせとも見られる複雑な対立の様相を見せている。即ち コ/ア, コ/ソ/ア, コ/ソ という三つの対立の場合が考えられる。コは「近」, アは「遠」という価値を積極的に表わしているのに対し, ソはこの二者との対立において「非近」「非遠」という価値を消極的に表わしている。このコソアの対立は日本人が昔から持っているウチ・ソトの意識と密接な関係がある。また, コソアの選択には対話者の視点という主観的な要素が大きく影響する。本稿では, 指示対象と対話者の視点の関係を共感度という概念を用いて客観的に表わす試みを行った。そして日本人の生活領域に関する意識という内面からのアプローチと数式による外面からのアプローチによって, コソアの体系に統一的な説明を与えることを図った。

はじめに

「これ」「それ」「あれ」は, ほとんどの日本語教科書の第一課で導入される。「これは本です」「それは鉛筆です」「あれは図書館です」等の文と, これらの文が発話される場面とによって, この三項対立は二項対立に慣れた欧米人の学生にもごく自然に問題なく受け入れられる。しかし, コソアの対立は近/中/遠, あるいは話し手/聞き手/それ以外という尺度では割り切れない場合も多く, また, 同じような内容を時と場合によって, コで指したり, ソで指したり, アで指したりするため, 学習が進むに従って学生はコソアの用法に戸惑うようになる。それはコソアの選択については主観的な要因が多分に含まれており, われわれ日本人にとって感覚的に理解することは出来ても, 論理的な説明を与えることはなかなか難しいからであると思われる。では, コソアの体系について論理的, 統一的な説明を与えることは不可能なのであろうか。

コソア(D)の研究は既に多くの国語学者, 言語学者によって進められてきた。コソアドの命名者である佐久間鼎は従来の「近称, 中称, 遠称」の差別はこの自称, 対称, 他称という, 対話の場

* SHIMAMORI Reiko: リヨン第三大学 (University of Lyon III, France) 外国語学部日本語科助教授。

における対立関係に対して内面的な交渉を持つもの」であり、「単に話し手からの距離の近い遠いというのではない」と述べ、「勢力圏内」という概念を導入した。そして佐久間は次のような図によって、コを話し手の勢力圏内（「わのなわばり」）、ソを相手の勢力範囲（「なのなわばり」）、それ以外の範囲をアと規定した。（佐久間鼎，1966）

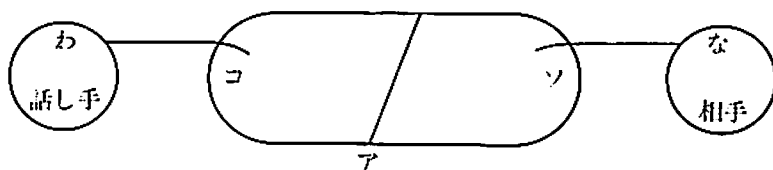


図 1

これに対して三上章 (1970) は、「コレ・ソレ・アレは triplet ではなくて double binary である」と提唱し、次のような二種の二項対立でコソアの構造を説明した。

1. コレ対ソレ：楕円型，話し手と聞き手が向かい合って楕円を折半している状態。
2. コレ対アレ：円型，話し手と聞き手が「我々」として同じ領域に属し，円内がコレ的，円外がアレ的。

この三上の説は，指示語を含む慣用表現（アチラコチラ，ソコココ，等）の中にソとアの組み合わせがないことによってその正当性が裏づけられる感があり，現代日本語における指示詞の用法をかなり明確に説明しているようである。しかし，それでは次のようなソの用法はどのように説明したら良いのであろうか。

例 1 A：お出かけですか。

B：ええ，ちょっとそこまで。

このソをコと対立するソと解釈することにはかなり無理があるようである。このようなソを解明し，指示詞の体系に統一的な説明を与えるために正保勇 (1981) は，緊張したソ・アと弛緩したソ・アを想定し，コソアの体系を次のようにまとめた。

1. 対立型（三上の楕円型）：コ（話し手の縄張り），ソ（聞き手の縄張り：緊張したソ），ア（そのどちらにも属しないと判断されたもの：弛緩したア）。
2. 融合型（三上の円型）：コ（「われわれ」の縄張り），ソ（コ（の領域）にもア（の領域）にも属しないと話し手が認めたもの：弛緩したソ），ア（遠くにある「われわれ」の関心の強いもの：緊張したア）。

こうしてコソアの研究は進み，正保の説でほとんど全てのコソアの用法は説明されるようである。しかしこの説でも，なぜ，ソは客観的でコとアは主観的と言われるのか，またなぜ「遠かな」存在を示すはずのアが話し手に心理的には近い存在を表わし得るのかという疑問に対する答を見

つけることは出来ない。これらの疑問に答え、コソアを体系的に把握するためには、発話コンテキストの中でのコソアの機能を対話者の視点との関連において考えることが必要と思われる。なぜならば、日本語のコソアは対話者の視点に応じて定まる一種の関数のようなものと見ることが出来るからである。

コソアの機能は大きくダイクシス用法と照応用法とに二分することが出来る。本稿ではまずダイクシスと照応の性質を明らかにすることから始める。この区別を確認した上で、以下の部分では主としてダイクシス用法に焦点を当てて稿を進めようと思う。コソアは指示詞であるからその基本的な用法は視野の中にある事物を指し示すダイクシス用法であり、照応用法はその応用と考えられるからである。

コソアの研究に当たってアプローチの仕方は色々あるが、本稿では二つの異なった角度から問題の本質に迫ってみたいと思う。その第一は、日本人の内面から、つまり生活領域、存在領域の意識の面からコソアの対立の意味を考えることであり、第二は、対話者の指示対象に対する共感度と、空間的、時間的距離の二要素を使ってコソアの本質を数式化する試みである。どちらも文学作品を始めとする一般書物から例文を集め、それを観察し分析することによって一般法則を仮定し、それをまた実例によって確かめるという手続きを取って、現状に即したコソア論理を導き出すことに努めた。素描ではあるが、本稿がコソアの体系的な把握のための一助となれば幸いである。

1. ダイクシスと照応

ダイクシスという用語は、言語学では一般に次のように定義されている。

「発話行為の空間的、時間的座標に発話を関係付ける人称代名詞、指示代名詞、テンス及びその他の文法的、語彙的言語形式の機能」(Lyons, 1977)

「話者は常に発話を発話行為の時と場所及び対話者に関係付ける：この発話の場を指示するのがダイクシスである」(ラルース『言語学辞典』, 1982)

ダイクシスとは、即ち発話の場(シチュエーション)との関連においてのみ意味を持つ相対的な価値である。言い換えればダイクシスとは二点(指示対象と発話の場)を結ぶ関係を表わすということになる。この機能を持つ指示詞は指示対象を主に話し手との関連において位置づけ、発話の場に引き入れる語である。コソアの現場指示用法は、まさにこのダイクシスの機能を持っており、対象を直接(しばしば身振り等をともなって)指示する。ダイクシス語を含む発話は、原則として発話の場にいなければ理解不可能である。

ダイクシス用法には、大きく分けて現場指示用法とテキスト・ダイクシス用法とがある。現場指示用法は対象を初めて発話の場を導入する機能を持ち、テキスト・ダイクシス用法は既に談話のコンテキストに登場している要素を話し手との関連において捉え直し、それを改めて指示する

役割を持っている。この意味でテキスト・ダイクシス用法は聞き手にとって未知の情報を提供する純粋なダイクシス用法(現場指示用法)とは異なり、既知の情報を談話内に位置づける点でむしろ次の照応用法と共通点を持っていると言えよう。これをダイクシス用法とするのは、指示詞が対象と話し手との何らかの関係を積極的に表わしている極めて主観的な表現方法だからである。

これに対して照応(anaphora)とは「談話の中のあるセグメント、例えば既出の名詞句を他のセグメント、主として代名詞によって繰り返す統語的な手続き」(ラールス『言語学辞典』前出)のことである。Lyons は前掲書の中で照応の機能を「先行詞を指示するというよりは先行詞の指示する対象と同一対象を指示する」と述べている。照応用法の指示詞は、確かに先行詞と同一対象を指示するが、ダイクシス用法の指示詞と違ってその対象を直接指示することはなく、あくまでも間接的に、先行詞を通して対象を指示すると言える。そこがダイクシス用法と照応用法の一つの大きな違いであろう。柳父章(1979)は、この関係をソシュールの用語を使って次のように表わしている。

指示代名詞 : Sa / Sé

文脈指示的代名詞: Sa / (Sa / Sé)

(ここで Sa は signifiant (意味するもの), Sé は signifié (意味されるもの)を表わす)

つまり文脈指示的代名詞のシニフィエの所には、先行詞に当たる言葉がそのまま入ってくるわけである。ただし柳父はコソアを文脈指示的とは認めず、「文脈指示的のごとく用いられる時でも、必ず指示的用法をかねている」と述べている。コソアの文脈指示的(本稿の照応)用法については稿を改めて詳しく検討する必要があるが、ダイクシス用法との本質的な違いは、上記の Sa と Sé との関係によって明らかであろう。

照応用法がダイクシス用法と異なるもう一つの点は、後者が主として話し手を基点として指示対象を位置づける主観的な用法であるのに対して、前者は話し手(または書き手)に関係なくコンテキストによって、その意味が一義的に定まるということである。それゆえ照応用法は概して客観的な用法ということが言えよう。

2. コソアの対立

コソアの対立関係については、大きく分けて二つの見方がある。その一つは三者が同一レベルで共存し、指示対象と対話者との関係によって三者の内の一つを話者が選択するという考えである。佐久間鼎, 正保勇, 久野暁などはこの立場を取っている。この見方では談話の成立する世界を話し手に属する領域、聞き手に属する領域およびそれ以外の3区分に分けることになる。これは人称代名詞の体系と並行した区分けであり、指示代名詞と人称代名詞という二種のダイクシス機能を持つ語群を統一的に説明出来るという利点がある。

もう一つの見方は、三上によって代表される二重の二項対立というべきものである。この立場では、話し手を中心にコ/ソ、ニ/アの対立だけを問題にする。ダイクシスがそもそも話し手中心の言語価値であることを考えると、この見解は指示詞の本質を突いていると言えそうである。話し手の関わらないソとアだけでは対立を作りにくいのである。

ここで例文1の「ちょっとそこまで」の「そこ」の意味を考えてみよう。三者対立の考えでも二重の二項対立の見方でも、ソは聞き手だけに属する領域を指示することになる。ところがこの例では、聞き手は話し手とほとんど同じ位置にいと想像されるから、このソが聞き手に属する領域を指すという解釈は成り立たない。我々の言語感覚から言えば、この種のソは漠然と「場所」を表す意味で使われているようである。「ちょっと人に会いに」と言う時の、漠然と「人」を表わす意味で使われる「ひと」に似ている。しかしもう少し詳しく考えてみると、この語によって(漠然と)指示されている場所は当然のことながら発話の時に対話者のいる地点からは離れた地点を指し、従ってコで表わすことは出来ないが、話者にとって遠かな領域に属するとも認められない(従ってアでも表わし得ない)地点を表わすものと解釈される。(更に、後に述べるようにアの使用は話し手と聞き手の視野に存在する遠かな対象か、話し手にも聞き手にも既知の対象かを示す場合に限られている。)この種のソは、コでもなくアでもない対象を指示するのに使用される、正保の言う「弛緩したソ」と言うことが出来よう。ということに、ソの概念はコとアの否定の上に成り立っているということである。

大野晋(1978)によれば、「日本人はウチ・ソトの意識を昔からはっきり持っていて、人間を親と疎で区別している」という。そしてコ系は自分のウチにあるもの、親しい存在を表わし、カ(ア)系はソトのもの、自分の領域外にある疎遠な存在を表わして、世界はコ系とカ系とに二分される。コ系の代名詞が古くはカ系(後にはア系)の代名詞と対になって使われることが多いのはその傍証である、と述べている(大野晋, 1974)。

日本人の生活領域、存在領域に関する意識に基づいて指示語の体系を分析するというのは非常に興味深い。大野の言うように、日本人の意識の中にはもともとコ(ウチ)とカ、またはア(ソト)との対立しか存在しなかったのではなかろうか。つまり「汝」はウチの存在として「我」と対立するものではなかったのである。「我」と「汝」とは気心の知れ合った同士であり、基本的に共同の場で生きていて、同じ視点で物を見、同じように考える存在と看做されていた。「我」も「汝」もそれぞれ独立した個人とは見られず、同じグループに属する互いに“交換可能”な存在なのである。日本人はこのように世界を自分に近いコの領域と自分に遠いカ(ア)の領域とに二分していた¹。

¹ 幼児の言語獲得過程でもコとアは比較的早く習得されるが、ソの習得には時間がかかるらしいことも、間接的にそれを裏づけていると言えよう。(参考: 佐久間鼎『現代日本語の表現と語法』復刊, 1983)

また、1988年7月に行われた国際交流基金主催の海外日本語講師研修会の「敬語A」の講義で佐田富雄は「日本人の意識ではIとyouの境界は点線で、youとheの境界は実線で表わされるのに対して、アメリカ人にとってはIとyouの境界は実線で、youとheの間は点線で表される」と述べられたが、この考察も指示詞の対立を考える上で興味深い。

ここに最も基本的なコ / アの対立の意識が生まれたのである。この二分法では、コは「近」、アは「遠」という、話し手から見た対象の位置づけを積極的に表わしている。原始社会の人の移動が少なく、気心の知れた人間同士だけで暮らしている間は、コ / アの対立だけで十分であったが、時代が進み、社会の機構がだんだん複雑になってくるにつれて、集団の構成員一人一人に自我が芽生えてきて、それぞれが独立した個人として考え、行動するようになる。こうなると、「汝」はもはや「我」に準じる存在とは看做し得なくなる。「汝」はウチなる存在ゆえアの領域ではないが、「我」とは区別されるべき存在として把握される。こうしてコの領域でもなく、アの領域にも属さないソの領域というものを作られたのだと考えられよう。従ってソはその由来からコとアの否定の上に成り立っていると解釈されるのである。ソは対象と話し手との関係を積極的に表わすコやアと違って、対象を「非近」「非遠」という否定の概念で消極的に捉えるのがその本来の用法だったのではないだろうか。従って次の例のように聞き手がいない場合(例2)、あるいは聞き手と話し手とが一体となって「我々」意識の成り立つ場でも(例3)ソは現われ得る。

例2 ゆうべはぼくが水彩画をかいてとうていものにならんと思って、そこらにほうっておいたのをだれかが立派な額にかけてくれた夢を見た。(夏目漱石『我輩は猫である』)

例3 そして私のカバンを抱きかかえて渡そうとせずに、いくら断ってもその辺まで送ると言っ
て承知しなかった。(川端康成『伊豆の踊子』)

例2は、日記の内容であるので普通聞き手はいない、あるいは想定されていない。このようなコンテキストでの「そこら」は漠然と「あまり遠くない場所」を指している。黒田重幸(1979)や正保勇(既出)は、内言、独白の場合にはソは現われれないと言っているが、漠然と対象を指す場合には「非近」「非遠」という価値で、例2のようにソ系列の語も現われ得るのである。

例3は、話し手と聞き手の領域が重なり合って「我々」の領域を形作り、ソで示される場所はその領域の外側に位置しているが、話し手の意識の中では発話の場所からそれほど離れていない地点を指しているものと思われる。これは先の例1の場合と同じケースである。この「その辺」は、次の「この辺」に対立するものであろう。

例4 この辺に郵便局はありませんか。

この例では、「この辺」とは話し手を中心にした円(ある一定の範囲)の内部を指し、話し手も聞き手もこの円内にいることを表わしている。話し手はその領域内に郵便局を探しているのである。この場合は聞き手も話し手と同じ視点から対象の世界を見ることになるので、話し手がコで指す物は聞き手もコで表わし、話し手にとってソの物は聞き手にとってもソで示される。

さて、同じウチなる存在である「我」と「汝」は自我の芽生え、成長にともなってやがて対立するようになる。この時、ソで示される領域はコの領域を単に否定するだけではなく、話し手は

それを積極的に相手の領域として認め、聞き手と向い合っている状況を作り出す。これが三上の楕円型、正保の対立型のコ/ソである。この場合のコとソは話し手と聞き手が交代すればそれにもなっていて交代する「転移詞」(shifter) と呼ばれる性質を持っている。話し手の領域と聞き手のそれとは重なり合うことはない。こうしてコとソの間に明確な境界線が引かれるのである。次の例を参照されたい。

- 例 5 「何です...虫でも入ったんですか...」
 「いやだ! 気味がある...むずむずして...」
 「ちょっと...失礼」
 といいながら、紺野は須賀のむっちり肉づいた白い背中に手を入れた。
 「何です...どこ?...ここですか」
 「いいえもっとそっちよ。ちくちくして...ああ、そこいら」
 「なあんだ...毛虫ですよ」(円地文子『女坂』)

この例では、紺野は須賀の背中に手を触れながら「ここ」といい、須賀は自分の体の部位を指すのにソ系の語を使っている。この場合「ここ」は他人の背中でも現在自分の手の触れている場所という意味で話し手が一時的に自分の領域と認めたものであり、「そっち」「そこいら」は聞き手が主導権を握っているこの場面では、話し手が自分の手の届かない範囲と判断してそれを積極的に聞き手の領域に委譲したことを示している。

この態度を更に推し進めれば、ソで表わされる対象は、話し手が指示対象を自己とは関わりのない存在と看做しているものということになる。これに対して「遠」を表わすアは久野(1973)も指摘しているように「その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合にのみ用いられる」という際立った特徴がある。つまりアの指示する対象は、話し手が自己との関わりを積極的に認めるものである。自己に関わりのないことを強調するソと自己との関わりを全面に押し出すアは、このように明らに対立することがある。次の例はこのソとアの用法の違いを端的に表わしている。

- 例 6 「...小杉荒太の方は鈍感です」
 「鈍感でしょうか、あの人」清子は言ったが、すぐ自分の言葉に気付いて「もちろんその人知りませんけど」と言った。(井上靖『ある落日』)

この小説では、清子は小杉荒太と特殊な関係にあるのだが、それは誰も知らないし、また、知られてはならないものである。初めつい「あの人」と言ってしまう。それによって自分との関わりを認めてしまった清子はすぐにその過失に気がついて「その人」と言い直し、対象を相手の方へ押しやるのである。ここではアが話し手、聞き手共に関係のある対象を示すのに対して、ソは聞き手と対象の関係のみを表わしている。

この種のアの使用は、原則として対話者に対象に対する共通の知識があることを前提とするため、「あれ」と言えばそれ以上の言語的(文脈)、または非言語的(身振り、手振り、指示対象が発話の場にいること、等)なコンテキストがなくても聞き手も指示対象に対して話し手と同じ情報を有していると話し手が判断した時にのみ使用される。次の例を参照されたい。

例 7 「あれもこのごろはだいぶ元気になって来たようだが」父は突然そんな私の方へ顔をもち上げてそのころ私と婚約したばかりの節子のことを言い出した。(堀辰雄『風立ちぬ』)

これは「私」と婚約者(節子)の父との会話で、節子の家を訪れた「私」に対するその父の第一声がこの文である。「あれ」に先立つ文脈がないのであるから、この「あれ」は照応用法ではあり得ない。当の節子はこの場に不在なので、現場指示用法でもなく、先に述べたテキスト・ダイクシスの用法と考えられる。この場合、「あれ」によって指示された対象(節子)は話し手の娘であり、聞き手の婚約者であるので、両者にとってよく知られた、しかも強い関心を寄せる対象である。このようなことが非言語的コンテキストとなって「あれ」という指示詞の言語コードが聞き手に正しく理解されるのである。

しかしア系の語は必ずしも聞き手と話し手との共通の知識だけを指すとは限らない。話し手が自己に関わりの強い対象を「遠」と捉えた時、聞き手のそれに対する知識の有無とは関わりなく、また、聞き手の有無にも関係なく、その対象をアで指示することが出来る。

例 8 妹は斜里のおくにいるんだ。あそこはよく馬櫓が通っているんだ。(三浦綾子『氷点』)

例 9 あれは確か三年前のことだった。

例 10 (….)昨夜不思議な外国人といっしょに、この簾の寝台へ上ったことが、はっきりと意識に踏みこんで来た。(….)彼女はおずおず眼を開いて、今はもう明るくなった寝台の中を見まわした。しかしそこには思いもよらず、毛布に蔽われた彼女の外は、十字架の耶穌に似た彼はもちろん、人の影さえも見えなかった。「ではあれも夢だったのかしら」(芥川龍之介『南京の基督』)

例 9, 10 のアは話し手が経験し記憶にあることで、時間的に遠かな存在と話し手が判断した対象を指示している。アは空間的、時間的には話し手から遠い存在を表わすが、話し手が積極的に「遠」と認めるということは話し手の強い関心を示すものであり、「近」を表わすコと共に話し手に心理的にはかえって近い存在を示すことになるのである。コ、アは話し手との関わりを表わすという意味で「有徴的」である。これに対してソはその基本的な意味が否定的であるため、話し手の関心の比較的薄い対象を客観的に指示する傾向が強く、従ってソで示される対象は話し手に心理的には遠い存在となる。ソは中立的(「無徴的」)な表現である。こうしてソはコ、アと心理的には「遠」/「近」という対立を成す。以上の関係を便宜的に座標上に表わすと図 2 のようになろう。

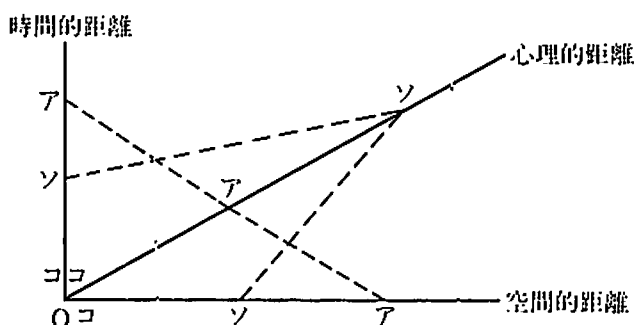


図 2

図2を参考にして、筆者はコソアの対立を以下のように捉える。

コソアは二項対立と三項対立の組み合わせである。即ち、空間的、時間的にはコ(近)/ア(遠)、コ(近)/ソ(非近、非遠)/ア(遠)、コ(近)/ソ(非近)、また心理的にはコ(近)、ア(準近)/ソ(遠)というように複雑な対立の仕方をしているのである。そしてこの対立を決定する要素は主に対話者の視点である。そこで次項では視点の観点からコソアの問題を考えてみることにする。

3. 視点とコソア

論理的には同じ内容を時と場合によって、コで指したり、ソで指したり、またアで指したりすることがある。対話者と指示対象との関係は客観的には変わらないわけであるから、コソアの選択の基準になるのは話し手の視点であると想像される。従って指示対象と話し手、聞き手の視点との関係は、コソアの根本的な問題を解く鍵だと考える。ここでは久野暲(1978)の用語に従って「共感(Empathy)度」という概念を用いてこの問題を考え直してみよう。久野による「共感度」の定義は次の通りである。

共感度：文中の名詞句の x 指示対象に対する話し手の自己同一視化を共感(Empathy)と呼び、その度合、即ち共感度を $E(x)$ で表わす。共感度は、値 0 (客観描写) から値 1 (完全な自己同一視化) 迄の連続体である。

ただし、本稿では同一指示対象に対する話し手と聞き手の視点が問題となるので共感度の定義を次のように改めて使用する。

共感度：言語的、または非言語的コンテキストにおける同一指示対象に対する話し手(S)および聞き手(H)の同化の度合いを共感度と呼び、それぞれ $E(S)$, $E(H)$ で表わす。共感度の値が1である時、その指示対象を話し手、または聞き手の共感点と呼ぶ。

コソアをこの観点から見直すと、コは話し手の視点が、指示対象に一致する場合であるから、

$E(S)=1$ で表わせる。指示対象と聞き手との関係を話し手が積極的に否定する場合は、聞き手と対象との関係は $E(H)=0$ で表わされようし、そうでない場合には、 $E(S)>E(H)$ で表わされることになる。同様に、ソを表わす等式、不等式は次の通りとなる。 $E(S)=0$, and $E(H)=1$ or $E(S)<E(H)$ 。これに対してアは話し手と聞き手が遠方(空間的、時間的)に共有する対象を指示する場合に使うのが本義と見ると、 $E(S)=E(H)$ と書き表わせる。この場合、話し手はもちろん対象と同化していないので $E(S)\neq 1$ であるが、また、全く客観的な表現とも言えないため、 $E(S)\neq 0$ でもある。前出の図2にも見られる通り、心理的距離という観点から見ればアはコとソのほぼ中間に位置すると看做せるので、共感度の数値を与えるとすれば(あくまでも便宜的ではあるが) $E(S)=E(H)\simeq 1/2$ とでも表わせようか。

共感度というのは、主観的な物差しであるが、指示対象と話し手との空間的、時間的距離関係(これを $D(s, t)$ で表わす)を加えると、図2で表わされたコソアの関係は次のように捉え直すことが出来る。

コ: $E(S)=1$, 且つ $E(H)=0$ または $E(S)>E(H)$; $D(s, t)=0$

ソ: $E(S)=0$, 且つ $E(H)=1$ または $E(S)<E(H)$; $D(s, t)\simeq 1/2$.

ア: $E(S)=E(H)\simeq 1/2$; $D(s, t)=1$.

(この内、 $1/2$ という数値は便宜的なものである) 以上の数式は次のように解釈することが出来る。まずコの $E(S)=1$ というのは話し手が指示対象と一体となっていることであり、それゆえコは主観的な表現とされるのである。話し手と指示対象の間の距離は $D(s, t)=0$ の表わす通り0である。 $E(H)=0$ or $E(S)>E(H)$ は話し手と聞き手が対立している状況でのみ有効であり、両者が「我々」意識で結ばれている時は $E(S, H)=1$ が成り立つことになる。(以下同様に、「且つ」以下の記述は聞き手が話し手の対立者としてはっきり意識されている時のみ有効とする)。ソの $E(S)=0$ は逆に話し手が対象から遠ざかっていることを示している。その為ソは客観的な表現と言われ、照応用法の地下もここにあると見られるのである。アでは話者が指示対象寄りの視点を取っていることが $E(S)\simeq 1/2$ という式によって表わされている(実際にはこの数値は話者の視点によって色々の値を取り得る変数である)。従ってアも、また主観的な表現である。アの使用に当たって指示対象は空間的、ないしは時間的に遠方にあることが必要条件であることが $D(s, t)=1$ によって示されている。

コ系の語の照応用法については、従来から「目に見えないものを指すのに用いられる場合があるが、これはあたかも、その事物が、目前にあるかのように、生き生きと叙述する時に用いられるようで、依然として、眼前指示代名詞の色彩が強いようである」(久野暁, 1973) ということがしばしば言われてきたが、これも $E(S)=1$ によって説明がつく。即ち、話し手は談話の中に入り込んでその指示対象に同化し、時間的にも空間的にもゼロの位置から叙述内容を眺め、記述していることの効果なのである。例えば、次のコはその良い例であろう。

- 例 11 私が読み出すと、彼女は私の肩に触るほどに顔を寄せて真剣な表情をしながら、眼をきらきらと輝かせて一心に私の顔をみつめ、瞬き一つしなかった。(…) この美しく光る黒眼がちの大きい眼は踊子のいちばん美しい持ち物だった。(川端康成『伊豆の踊子』)

このコは、純然たる照応用法ではなく、前の叙述内容を指示すると同時に話し手の視点が踊子の眼と一致していること、言い換えれば踊子の眼が話し手の共感点であることを表わしている。それゆえにこの種のコは 1. で述べたテキスト・ダイクシスと解すべきなのである。

コはまた情報の焦点を表わすとか、テキストの主要テーマを表わすとか言われることもあるが(正保勇, 1981 参照)、これもコが話し手の視点の位置する所を示す働きを持っていることを考えれば当然の現象と言えよう。情報の焦点は話し手が最も関心を示す対象であるし、テキストの主要テーマもまた然りである。これらは話し手の共感点となり、従ってコの指示を受けるのである。次の例文は森本哲郎著『日本語「表と裏」(新潮文庫, 1988) 中の「やっぱり」という言葉を扱った章から採ったものである。

- 例 12 (…)数多くの日本語の中で「やっぱり」あるいは「やはり」という慣用語こそ、何より日本的な性格を正直に告白している言葉といえないであろうか。私はこの言葉こそ、日本の「主語」だと思う。

この後の文は「こそ」の存在からも分かるように強調構文であり、焦点は「この言葉」である。このような場合にはソやアを排斥してコの独壇場となる。森本の本のこの章で主題となっている「やっぱり」「やはり」は「この言葉」「この慣用語」というようにほぼ一貫してコで指示されている。次の一節はコとソの用法の対比を示して興味深い。

- 例 13 なぜ私がこの慣用語を気にし始めたのかというと、じつは、知り合いのアメリカ人にその意味をきかれたからなのである。彼は日本語の勉強のために、日本のテレビやラジオをよくきいているのだが、対談とか討論番組になると、出席者がやたらに「やっぱり」を連発することに気がついた。そのように連発される「やっぱり」という日本語の意味はどういうことなのか、というのである。そういわれて、私は返事につまった。はて、「やっぱり」とか「やはり」とはどういう意味なのだろう。慣用語なので私はべつにその意味を深く考えたこともなかった。しかし、それ以来、私もテレビやラジオを注意してきくようになった。すると、とたんに「やっぱり」とか「やはり」という言葉が気になりだした。気になるといよいよこの言葉が耳につくようになる。しまいにはイライラするようにさえなった。そして、こんなにも日本人が会話のなかでよく使う以上、この言葉には、きわめて日本的な意味がこめられているにちがいない、と思い始めた。
- では、その意味とは何なのか。(森本哲郎『日本語「表と裏」』)

少し長い引用になったが、コとソの背景を理解するために必要なので一段落全体を書き抜いてみた。この段落の主題は「『やっぱり』『やはり』という言葉」であるので、この言葉自体を指示

するのは常にコである。つまり『『やっぱり』『やはり』という言葉』が話し手の共感点である。ところが『『この言葉』の意味』はソで受けられている。これは話し手の視点が「言葉」に置かれているため、「意味」の方は共感点となり得ないので、話し手の立場の入らない照応用法のソで指示されているものと見ることが出来る。もしここで「意味」をコで受けたとすると、話し手の視点は「言葉」から「意味」に移り、「意味」が新たな主題として設定されることになる。次に「そのように」と「こんなに」の違いを考えてみよう。前者はアメリカ人のことばを間接話法で表わしたものと思われるが、日本語には直接話法と間接話法の明確な区別がないので、実際にこのアメリカ人が「そのように」と言ったのか、あるいは「このように」と言ったのか、はっきりしない。ただ日本語では間接話法の形を取っていても(即ち「」の中に入っていないくても)発言された形に近い形で再生することが多いことを考えると、このアメリカ人も実際に「そのように」と言った可能性は高いと言えよう。彼は外国人であるので日本語、日本の社会を外から客観的に観察する姿勢が強く、そのため『『やっぱり』の連発』という現象に多少距離を置いて言及していると思われる。著者は日本人であるので同じ現象を、一旦それに気がついてからは内部から直接体験として叙述することになる。このコンテキストの中でのコとソの対比はこのように話し手の視点と共感度(コは $E(S)=1$, ソは $E(S)=0$) の概念で説明出来るのである。

ソは、また仮定に基づいた叙述内容や話し手が概念知識しか有していない指示対象を指す時に用いられる(正保, 前掲論文)と言われるが、対象が存在するかどうか分からない場合、また話し手が指示対象をよく知らない場合には、当然のことながらその対象に同化することはしにくいわけで、その結果コが使えないからここでも照応用法のソを使うことになるのである。次の下線のソは仮定の事柄を指示する例である。

例 14 「手きびしいですね、あいかわらず。その調子じゃ、結婚してご主人が浮気したら、どうしますかねえ」「分からないな、それは。髪ふり乱してさわぎ立てるか、ものもいわずにブスリとやるか。人間だもの、浮気の虫の二匹や三匹はいるさと、案外さばけたところをみせるか、その時にならなきゃ、わからない」(三浦綾子『氷点』)

例 15 は、不特定の対象を指示するため、やはりコやアでは受けることが出来ず、ソの照応用法で受けている例である。

例 15 言葉というものは、それが無意識のうちに使われれば使われるほど、何か秘された重要な意味を持っているものである。それだからこそ、精神分析ではふと口をついて出る言葉を、精神分析の大切な手がかりにしているのだ。(…)何気なく口にした言葉であっても、その言葉はその人の心のメッセージであり、正直に本心をつたえているのである。(森本哲郎『日本語 表と裏』)

アの基本的な用法は、次の例の示すように話し手と聞き手の視野のなかにあってどちらにとっ

ても遠方にある対象を指示することと考えられる。

例 16 「あれが大島なんですね」「あんなに大きく見えるんですもの。いらっしやいませ」
(川端康成『伊豆の踊子』)

この状況では話し手も聞き手も同じ程度の関心を遠方に見える対象に寄せている。 $E(S)=E(H)$ と表わせる状況である。現場指示用法ではないアも用法の原理はこれと同じであって、話し手と聞き手が同一対象を頭の中に思い描いている状態と言えよう。

例 17 「あの芸人は今夜どこで泊るんでしょう」「あんな者、どこで泊るやらわかるものでございますか(…)」(川端康成『伊豆の踊子』)

話し手、聞き手両者共通の経験でもそれをアで指示せずソを用いることがある。例えば、次のような例がそれである。

例 18 「その節は、ごていねいにどうも…」(三浦綾子『氷点』)

これは話し手の娘の葬儀を指して言っており、聞き手はその葬儀に参列しているのであるから、両者とも指示対象に対する共通の経験があるわけである。従って普通ならアを使用するところである。ここであえてソを用いたのは「共通体験」を全面に押し出すよりも話し手が自己に関する事柄との関係を積極的に否定して ($E(S)=0$) 客観的に描写した事柄の影に隠れ、それによって発話に丁重さを加えるためと考えられる。

このようにアは一般に話し手と聞き手の共通体験を全面に押し出す働きを持っているので、書物のように不特定多数の読者を相手にする場合には現われにくい。これは $E(S)=E(H)$ の関係が成り立ちにくいからだろうと思われる。しかし、全く現われないわけではない。次の例を参照されたい。

例 19 そう聞かれて、私はあらためて日本人があいまいな言葉を好み、あからさまな言葉をきらうというあのフロイスの指摘を思い出したのであった。(森本哲郎『日本語 表と裏』)

これはある章の最後の文であり、「フロイスの指摘」というのは章の始めに紹介されている。そこで著者はそこまで読み進んだ読者なら当然知っているという想定のもとに「あの」を使うことによって読者の視点を自分のそれに合わせ、読者を著者との共通体験の場に引き入れて一体感を高めようとしているのである。

次の例は日記からの引用である。日記は独言同様相手がいない状況での発話であるが、これはまた自分自身を相手と考えての発話とも解釈出来よう。とすると、自己の体験は分身である“相

手”の体験でもあるわけだから記憶にある過去の出来事を表わすのにア系の語を用いるわけである。

- 例 20 ○○という人にきょうの会ではじめて出会った。あの人はだいぶ放蕩した人だといふがなるほど通人らしい風采をしている。(…) あの人の細君は芸者だそうだ、うらやましいことである。(夏目漱石『我輩は猫である』)

相手がいけない場面でのアの使用も根本的には自己を相手と想定していると言えるが、この場合共感性に関する次の式： $E(S)=E(S)$ は意味がないので、結局距離に関する式： $D(s,t)=1$ だけが有効となり、話し手が空間的、時間的に遥かな存在と認めた対象に対してアが使われるのである。以下の2例はその例である。

- 例 21 そして立上がつて窓を開け、冷たい星空を見入って、声になりそうな悲しみを我慢していたのですが、ふと、あの星空の中を、今母さんの愛情が昇天しつつあると思ったら、誰にも知られず、こっそりと、星と星との間を走っているのだと思ったら、醬子はもう我慢できなくなったのです。(井上靖『隼銃』)

- 例 22 仙吉には「あの客」がますます忘れられないものになって行った。(…)彼は悲しい時、苦しい時に必ず「あの客」を想った。それは想うだけで或る慰めになった。彼はいつかはまた「あの客」が思わぬ恵みを持って自分の前に現れて来ることを信じていた。(志賀直哉『小僧の神様』)

例 22 の「あの客」は仙吉の内言を再現したものと思われる。仙吉の記憶にある遥かな存在である客は「あの客」として指示され、このアの効果によって読者は仙吉の体験を追体験するのである。この「客」をソで受けた場合には単なる照応になり、この部分は客観的な、読者に何の共感も呼び起こさない描写になってしまう。

おわりに

コソア系列の語は単に指示対象と話し手との空間的距離関係(近, 中, 遠)を表わすものではなく、対象を発話の場に位置づけ、対話者と指示対象との空間的、時間的、心理的な関係を表わすものである。

本稿では場の区分を日本人の生活領域に関する意識に基づいて、次のような三つの場合に分けた。即ち、コ(近)/ア(遠)、コ(近)/ソ(非近、非遠)/ア(遠)、コ(近)/ソ(非近)である。対立は歴史的にこの順で現われたのではないかと想像される。大野晋(1974, 1978)によると、「コはウチにあるものを指し、『親』と扱い、カ(ア)はソトにあるものを指示し、『疎』として扱う」という。「近」「遠」「非近」「非遠」というのは、従って物理的な価値ではなく、心理的な極めて主観

的な価値である。本稿ではこの主観的な価値を敢えて数値化し、数式に表わしてみた。数式化に際しては久野暲の「共感度」という概念を援用し、話し手の視点、聞き手の視点と指示対象の空間的、時間的位置関係によってコソアを体系づけようと試みた。結果だけをもう一度記すと以下の通りとなる。

コ： $E(S)=1$, 且つ $E(H)=0$ または $E(S)>E(H)$; $D(s,t)=0$

ソ： $E(S)=0$, 且つ $E(H)=1$ または $E(S)<E(H)$; $D(s,t)\simeq 1/2$

ア： $E(S)=E(H)\simeq 1/2$; $D(s,t)=1$.

もちろんコソアの微妙な使い方の全てが、この簡単な数式で解明出来るわけでないことは十分承知しているが、「話し手の共感度」の数値から、例えばコとア(それぞれ $1, 1/2$) は主観的表現、ソ(共感度 0) は客観的表現と言われることの説明がつくようである。この数式は対話者の視点という主観的な価値で定まるコソアのダイクシス用法の基本的性質を表わしているものである。照応用法は本来話し手の視点とは無関係な用法であるので、最も客観的なソのみがここから照応用法に移行する可能性を持っていると言えよう。話し手の立場が常に何らかの形で反映されるコとアには純粋な照応用法というのではない。「文脈指示用法のコ、ア」と言われるものは本来テキスト・ダイクシスと呼ばれるべきものである。

本稿ではコソアの様々な性質に統一的な説明を与えることを目的としたため、個々の用法は検討出来なかった。照応用法とテキスト・ダイクシス用法の区別は現段階では、まだはっきりと立てられておらず、それぞれの言語学者によって異なった見解が出されている。照応とダイクシスの根本的な違いを明らかにするとともに、多くの実例を集めて観察し、両者の基本的な性質を研究することは今後の課題である。また、いわゆる「文脈指示のコ、ソ」の相違は大雑把に言ってダイクシス性と照応性の違いと言えようが、テキストにおけるコとソの用法の違い、またゼロ照応(指示詞の省略)と指示詞による照応の選択の違いから生まれる文章効果などはコンテキスト・レベルの、更にはもっと広い視野で談話レベルの研究がなされなければならない。

本稿で不十分ながら見たように、日本語の指示詞はコ(「近」)/ソ(「非近」「非遠」)/ア(「遠」)の複雑な三項対立を成している。これに対して、英語は *this / that*, フランス語はほぼ *-ci / -là* の二項対立である²。どちらの言語でも前者が「近」を、後者が「非近」を表わしていて、この後者が場合によって相手の領域を表わしたり「遠」を表わしたりするようである。ところが面白いことにフランス語では最近くだけた話し言葉の世界ではこの区別が段々なくなり、「非近」が「近」を吸収しつつあるという現象が起きている³。これは自己の主観性の強い部分が外の客観性の強い領域に吸収され、より客観性の高い表現を目指していることの現われなのだろうか。日本語で

² 場所に関しては、*ici / là / là-bas* の三項対立が体系的にはないが認められる。

³ 例えば *Viens ici / là*. 「ここにおいで」や *cela* 「それ」の短縮形である *ça* が *ceci* 「これ」の意味で使われる。

は三項対立は依然として揺らぐ気配はない。日本人は相変わらずウチ / ソトの区別を維持し、極めて主観的な物差しで存在領域を区分しているようである。日本語が論理的でないと言われるのも言語表現の中でこの主観的表現(従って対象の捉え方の違いによって様々な形を取り得る表現)の占める割合が多いことに依っているのではないだろうか。

参 考 文 献

- 池上嘉彦 (1983) 「テキストとテキストの構造」、『談話の研究と教育 1』, 国立国語研究所, 大蔵省印刷局。
 池上嘉彦 (1989) 「日本語のテキストとコミュニケーション」, 『日本文法小辞典』, 大修館書店。
 大野 晋 (1974) 『日本語をさかのぼる』, 岩波新書。
 大野 晋 (1978) 『日本語の文法を考える』, 岩波新書。
 金川章宏 (1987) 「指示代名詞の体系と用法」, 『国文学 解釈と鑑賞』二月号, 至文堂。
 神尾昭雄 (1989) 「情報のなわ張りの理論と日本語の特徴」, 『日本文法小辞典』, 大修館書店。
 金水 敏 (1989) 「代名詞と人称」, 『講座 日本語と日本語教育 第四巻, 日本語の文法・文体(上)』, 明治書院。
 金水敏, 木村英樹, 田窪行紀 (1989) 『指示詞』, くろしお出版。
 久野 暁 (1973) 『日本文法研究』, 大修館書店。
 久野 暁 (1978) 『談話の文法』, 大修館書店。
 黒田重幸 (1979) 「(コ)・ソ・アについて」, 『林栄一教授還暦記念論文集・英語と日本語と』, くろしお出版。
 阪倉篤義 (1986) 『改稿 日本文法の話』(第二版), 教育出版。
 佐久間剛 (1966) 『現代日本語の表現と語法』, 恒星社厚生閣, 復刊 1983, くろしお出版。
 正保 勇 (1981) 「『コソア』の体系」, 『日本語の指示詞』, 国立国語研究所, 大蔵省印刷局。
 田中 望 (1981) 「『コソア』をめぐる諸問題」, 『日本語の指示詞』, 国立国語研究所, 大蔵省印刷局。
 寺村秀夫他編 (1987) 『ケーススタディ 日本文法』, 桜楓社。
 林 四郎 (1990) 「文の成立事情」, 『国語学』160, 国語学会。
 三上 章 (1970) 『文法小論集』, くろしお出版。
 村木正武 (1989) 「言葉の機能」, 『日本文法小辞典』, 大修館書店。
 森田良行 (1980) 『基礎日本語 2』, 角川書店。
 矢澤真人 (1985) 「『こそあど』と空間の捉え方」, 『言語』12月号。
 柳父 章 (1979) 『比較日本語論』, 日本翻訳家養成センター。
 山口佳紀 (1976) 「体言」, 『岩波講座 日本語 6, 文法 1』, 岩波書店。

Dubois, Jean, Mathée Giacomo, Louis Guespin, Christiane Marcellesi, Jean-Baptiste Marcellesi and Jean-Pierre Mével. 1982. *Dictionnaire de linguistique*. Paris: Larousse.
 Lyons, John. 1977. *Semantics II*. Cambridge: Cambridge University Press.